日刊 動労千葉

81.5.31

No. 全国版 87

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一-八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

三里塚・ジェット闘争貫徹！「国鉄35万人体制」粉砕！

第37回全国大会を期して

動労運動の戦闘的再生かちとろう！

全国の動労組合員のみなさん。

動労千葉は、三月ジェット決戦勝利の確信も高く前進しています。八一ストなし春闘惨敗の中で、路線的・組織的破綻にあえぐ「本部」反動分子は、ますます消耗を深め、動労千葉へのケチつけにもならないケチつけに出てきていますが、動労千葉組合員の確信の前に、嘲笑の対象でしかない存在となっています。

このような中で、第三七回全国大会を迎えようとしている訳ですが、「本部」反動分子は、この三〇周年記念大会をもセクト的に利用し、〝合理化の尖兵＝当局の武装親衛隊〟としての自らの実態をおしかくし、国鉄三五万人体制合理化攻撃にさらされた職場・生産点の苦闘を、さらに、当局に売り渡すためのステップにしようとしています。

断固たる三五万人体制粉砕方針を！

国鉄労働者にとって、今日時点での最大の課題が〔三五万人体制合理化攻撃といかに対決し、粉砕してゆくのか〕であることは鮮明です。

「本部」反動分子は、この間、反合闘争について、〔武操合理化への屈服・貨物安定宣言〕という敗北の路線を、デタラメな〝経済学〟を暴力的に押しつけることによって、動労組合員に強要しゴマカしてきました。合理化協力を前提に、自らがセクト的に生き残ることのみを目的とするこの敗北路線によって、当局は大いによろこび、動労組合員が多くの犠牲を押しつけられてきました。

その集大成として、三五万人体制の初年度である「五五・一〇」において、反動分子が当局とともに交した「五五・一〇確認事項」があります。

当局の合理化計画の基本方針書ともいうべき「監査報告書（五四年度）」の内容をそのまま箇条書きにひきうつしたに等しい、この「五五・一〇確認書」の路線をもってしては、三五万人体制合理化攻撃と対決する方針など出てくるはずもありません。であるがゆえに、「本部」反動分子は、助士廃止を上回る質と内容をもった五五・一〇における乗務員運用合理化攻撃を「地方課題である」として投げ出さざるを得なかったのです。

深刻な組織的・財政的危機

「本部」反動分子の当局への反合闘争の売り渡しによって、動労は大きな組織問題に直面しています。

八一春闘一票投票の集計表によれば、動労の組合員総数は約四万四千人となっています。そして、八一および八二年度の特退者が続出することによって、数年を待たず動労組合員数が〝三万人台に転落することが、多くの心ある組合員によって指摘されています。

このような中で、動労が組織的・財政的に極めて厳しい状況に追いこまれることは必至であります。にもかかわらず、【数億の組合費を投入し、多くの組合員を動員し、三年の月日をかけても八〇名足らず（しかも、そのうち二八名もがまもなく各局へと帰任してゆく短期転勤者!!）の組合員しか獲得できなかった「千葉問題」の組織責任】はどうなのか、――また、【「水本」運動にのめり込み、組合員をセクト的に引きまわし、多額の組合費をつぎ込み、しかも「水本事件の真相を究明する会」の世話人がなんと警察のスパイであり、権力に通じた運動をやっていたという断じて許せない事実が判明しているにもかかわらず、それをひた隠しにしてきていることに、どう組織的社会的責任をとるのか】という組合員の声が職場に充満していることは当然のことなのです。

動労大改革へ向けて

「本部」反動分子がこの間とってきた路線たるや、合理化への屈服→組合員激減→組織的・財政的危機という構図のもとで、動労千葉三月ジェット決戦ストへのスト破り→八一春闘のストなしを卒先して策動→国労との共闘が唯一〝最大の成果〟とあがめ→鉄労もまで含めた「五組合共闘（倒）→合体」への道を画策するという反動的・右翼的路線におちいっているのです。

全国の動労組合員のみなさん。

第三七回全国大会は、以上のように極めて厳しい情勢の中で、反合方針、組織・財政方針をはじめとする課題に、動労の戦闘的伝統に踏まえた闘う方針を確立することが何よりも問われています。〝祝・三〇周年記念〟にことよせた「本部」反動分子のベテン的論点ボカシと敵対をはねのけ、戦闘的動労運動の再生＝動労大改革へ向けて、共に奮闘しようではありませんか。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！